

Sal'ence まがえんす

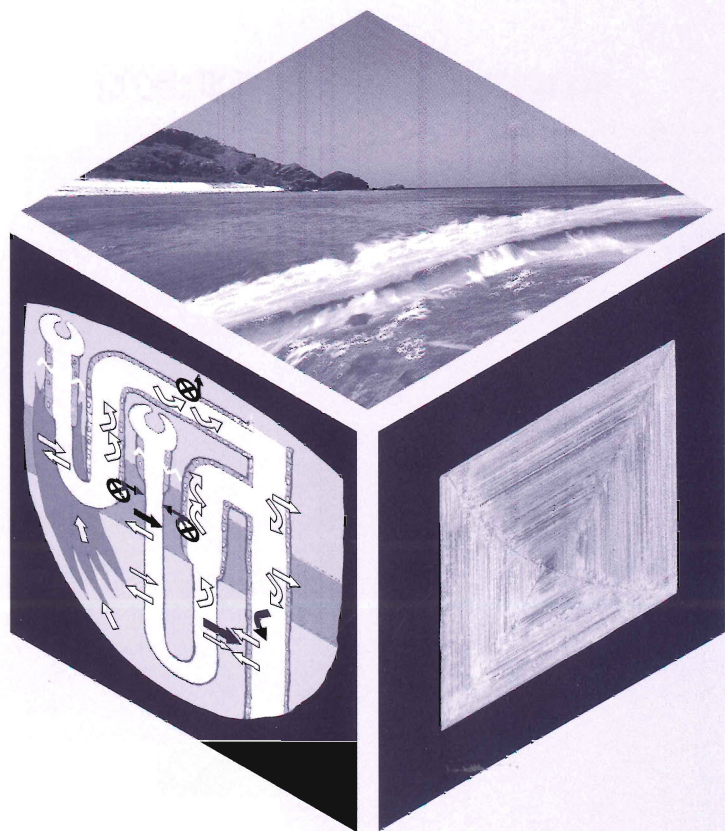
6

JUNE 2009 No.81

あの頃のこと 関口悦藏

パキスタン国訪問記 山内 昭

明治天皇と絵巻物 — 広島大本営行在所の^{あんざいしょ}一齣^{ひとこま} — 太田健一



目次

巻頭言 あの頃のこと 1

関口 悦藏

パキスタン国訪問記 2

山内 昭

明治天皇と絵巻物 — 広島大本営行在所の^{あんざいしょ}一齣^{ひとこま} — 8

太田 健一

第44回評議員会・第48回理事会を開催 14

財団だより 16

編集後記



関口 悦藏

全日本塩販売協会会長

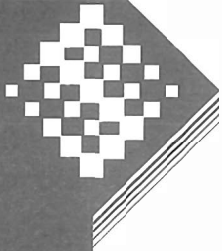
勲ソルト・サイエンス研究財団
評議員

あの頃のこと

終戦から6年1951年4月入学式で大隈講堂に居りました。総長の訓辞の「学ぶことは当然の事、体力・智力・気力を身に付けなさい。どんなに小さな事でもここまでやったと云う限界までの努力の結果の出た瞬間を大事にして下さい。それが諸君の自信となり社会に貢献する大きな力となるのです。」そして間もなく課目選択で体育の実技を決める事となり、兄が理工学部3年に在学中で相談した処、同級生が弓道をやっているから相談したらと云う事で当時西門の近くに戦争中に武道館と称した体育館の屋上にある弓道場に参上した。先輩は堂々とした口調でとことん厳しい事を云い出され、返答をする間も与えられず、入部を決定されました。当時は武道は正式には学校では公認されておらず部活動の再認可を申請中で、わずかの学校と定期的に親睦試合を行っている程度でした。練習は時間のある限り毎日でも通って来なさい。それからと云うもの礼法から始まり厳しい躰、そして紹介された先輩の口うるさい指導で道場では新入部員と云う事で雑用掃除と命令され余裕のある雰囲気は持てません。然し己れの決めた事やり抜く

のだと云う覚悟で練習に励みました。半年ほどでこの場所が体育館に改築される事となり新橋にあった東京電力本社の屋上の弓道場を借用する事となり満員電車での道場行が続ききました。一年ほどの後に甘泉園に道場が建築される事となり、仮道場が狭いながらも完成し、学業と共に練習出来るようになりましたが、学年は上がっても技術は向上せず苦悩の毎日が続きます。練習には人一倍努力はしましたが高校から技術を持った新入部員が加わり、選手の座も明け渡す事たびたび、何度と無く挫折の淵を歩んだ事が、当時は選手級の練習は別格で、上級生でも選手の射の当り残念を観的係として大声で知らせ放たれた矢をきれいに拭いて選手に届ける、孤独感と屈辱感は今でも忘れることは出来ません。

足踏・胴造 弓構 打起 引取 会 離
残心(弓道八節)と一連の動作のうちに一貫した精神をつぎ込んで一射を行う、理論は判っていてもなかなか当りがついて来ないそんな日々の続いていた3年生になった6月の或日一級上の私同様当りが無くて大苦勞している先輩が、君は射型は良いのに、弓は心で引くのですヨ 当て欲がマルミエですヨ 射の流れが一貫していない、会と離の間に角見と伸合を確実に一射一射努力しなさいそうすれば君は名手になると僕は見ていると力強い云葉を頂きそれから時間があれば一緒に練習をしてくれました。その為か呼吸も平常心の保ち方も判りかけてきました。百射会での83中そして9月に部員85名の伝統ある早大弓道部の主将に選出され新道場披露での矢渡し、翌夏の全日本選手杯では団体3位、個人6位・又栄誉ある技能射型優秀賞を頂き、秋の学生弓道王座戦に同志社大学を大差で破り学生弓界の王座を射とめました。そして大隈会館での大浜総長からの表彰を受け入学式の訓辞の返礼が出来た。これからは後輩の指導そして私を育てて呉れた弓道部にお返しをと緊張して卒業しました。



パキスタン 国訪問記

山内 昭

福岡大学非常勤講師

1. はじめに

在職中はソルト・サイエンス研究財団に数度に亘り研究資金助成を受け、大変お世話になった。その財団の専務理事、池田勉氏より財団発行の季刊誌「そるえんす」に寄稿を依頼された。振り返れば36年間の在職中は各種助成金を頂いたが、近年、国からの予算が大型プロジェクトに集中され大学校費が年々減少する傾向にあり、この援助が有難かった。

ここで依頼のテーマは研究生活の身辺での思い出等についてと云うことであるが、個人的には大学に居ると余り世間との繋がりが多くなく研究・実験で野外に出かけることもなく、基本的には毎日が大学と自宅との往復でたまに東京やその他の地方への学会参加の際が世間との接触であった。その中で思い出の一つとしては海外の研究者たちとの交流である。異なった環境・文化の中で異なった発想を持った人達との交流はとても新鮮であった。これまでに長くて2年、通常は1週間から10日程の海外出張を経験してきたが、変わったところでパキスタンでの1ヶ月に亘る滞在の機会があり、その時の研究を離れた面からの交流を紹介しようと思う。

2. パキスタン訪問に至る経過

2000年に文科省の招聘プログラムでパキスタンの原子力研究所に在職のA. Choudry博士を九大理学部で1ヶ月の滞在を受け入れ、私の所でお世話した。彼は英国の有名な膜研究者であるP. Meares教授のところで液膜に関する論文で学位を得た研究者で山口大の故佐田利勝教授を通しての知り合いであった。1ヶ月の滞在中で日本の研究環境や日本文化に感銘を受けたようでした。ご他聞にもれず彼も敬虔なイスラム教の信者でそのお陰で九大留学生内にイスラム教

を絆とした他国からの留学生の集まりがあることを知り、またパキスタンから数名の留学生が在籍していることを知った。日本各地の大学・研究所で講演をした後、広島原爆記念を訪問したいとの願いで途中広島に立寄りそこで非常に敬虔な見学態度を目にした時、我々日本人社会が如何に忙しいとはいえ宗教に少し無関心すぎるかとも思った。帰国にあたって、次は是非パキスタンに来てくれるよう懇願された。



写真—1 私のオフィスの有った化学部の建物

3. パキスタンへ

その後数度にわたりパキスタンからの招聘にも拘らず、ご存知の如くの世界情勢のなかで、また大学当局からの危険地域への海外渡航の自粛などの通達もあり、また家族もよい顔をせずそのまま月日が経過していった。2006年3月、退職により晴れて自由の身(?)となり、これまでの研究の整理を兼ねてパキスタンでの講演依頼を引き受けることにした。現在に至るまでアジア方面には中国と韓国を除いて訪問の機会が無く、インドを始めシンガポールなど東南アジアには行く機会が無く、ましてやイスラム圏への訪問は初めてである。しかし福岡からは意外と便利で途中乗り継ぎはあるがパスポート・ビザさえ準備できれば時差もそれ程気にならず比較的簡単であった。出発前のメールの交換では半年か少なくとも3ヵ月の滞在を要請されたが、単身でもあることだし、何とか1ヶ月ということにして貰って話が決まった。2006年10月28日、パキスタンの首都イスラマバードに向け出発した。

4. QUAID-I-AZAM 大学

この大学で私のパキスタンでの1ヶ月間の貴

重な経験が始まった。日本ではパキスタンという国をマスコミでのみ知るだけで余り一般には知られていないパキスタンを紹介してゆきたい。当時、パキスタンはムシャラク大統領率いる軍事政権で、アフガニスタンとの国境での目立った紛争も無く比較的穏やかな時期であった。

表記のQUAID-I-AZAM 大学は1967年に創設された大学院大学で全国からの優秀な大学院生が集まって来ると云う事であった。キャンパスは首都イスラマバードから車で20分ほどの丘陵地にあり、とても広くその境界がはっきりとせず、まだ至るところ未開の砂漠地があり、現在も建物が建築予定との事であった。政府は国の高等教育には力を入れ、そして期待を込めており、博士コースの学生は半年から1年ほどの海外研修などがあり、大学は十分な資金援助を受けているようだった。まず初日に1部屋オフィスがあてがわれ、そこでインターネットが無事繋がるかどうか確認した。そして一ヶ月間の予定を確認した。本大学では講演数件とその他は院生との個別のDiscussion、およびカラチその他の3箇所の大学訪問・講演が私の義務であった。隣が私の滞在中の世話をしてくれた化学部門学部長のM.Mazhar教授の部屋であった。午前11時頃になるとその先生がTea timeといって誘いに来て30分位Faculty roomで初日は私の紹介を兼ねたお茶飲み会があった。この時間帯に毎日化学の各分野の

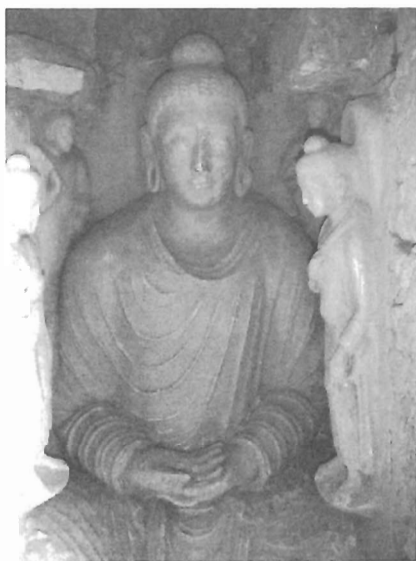
Faculty member が10～15名程集まって紅茶とクッキーで雑談の時間が設けられていた。この時この国は英国の雰囲気が色濃く残っているのを感じた。イスラマバード空港から迎えるのに乗った時の車の左側通行にもこれで納得がいった。研究室、実験装置、機器などひと通りの見学をさせて貰ったが最新の機器はないがひと通りの装置が稼働中であった。学生は男女の数がほぼ同数位であり、男性は活発で明るく行動的であるが、女性は個人差にも因るが一般に控えめであった。M. Mazhar教授がこぼしていたが、授業中出席を取るときバールで顔が見えないので確認が出来にくいことがあるそうである。このバールで顔を覆う様子も個人差があり、単にスカーフ程度の学生もあり、これは宗教の違いに依るものであるかと聞くとその家庭の慣習に依るとのことだった。因みに私の部屋に議論にきた女子学生は顔は隠さずに現れた。イスラマバードへの遷都が決まり都市計画が始まったのが1961年だそうでそれから50年近く経ち、政府機関およびその周辺道路が整備されたが、大学の建物は未だ整備が整わぬうちにもう既に建物が老朽化し始めておりかなり古くなっているようであった。これは過去数度に亘って国内政情が乱れ、その他の諸問題もあって気の毒なことである。一つ驚いたことがあった。私が住む北部九州には昔炭鉱が幾つもあり、人々は炭坑節に馴染みがあり、誰もが良く知っているのであるが、この男子学生が一寸した大学の催しなどにこの炭鉱節を全く同じメロディで同じ動作で輪になって楽しんでいる光景に出会った。歌詞はおそらくウルドゥー語で判らなかつたが、説明の学生に聞くと4、5箇所の方から来た学生の共通の踊りだそうである。そのルーツは今でもよく判らない。学生は真面目で素朴でありこういう踊りで若者のエネルギーを発散させていた。彼らは寄宿舎に住むか超満員のスクールバスで毎朝、5時にお祈りを済ませて自宅から通学しているようであった。質素な研究生活を送っている彼らはやがて国の将来を担ってゆくことになるのであろう。

5. イスラム社会にひと月住んで

日本ではそろそろ朝夕が冷え込んでくる11月だが、私が滞在したイスラマバードの外国人用宿舎の庭にはこの時期にバナナやピワが実をつけ、びわの収穫は3月頃だそうである。ブーゲンビリアが咲き乱れまさにここはトロピカルゾーンであった。その所在地は大統領官邸を始め政府機関の集中した官庁街のすぐ近くで道路には50m毎に銃を持った警官が警護していた。そこは5家族ぐらいが一緒に宿泊できるくらいの広さの宿泊所であったが基本的には私一人であった。料理人と世話係の2名が常時待機していてその他時々臨時に2、3名が世話係として姿を現していた。朝5時、近くのモスクから突然お祈りがポリウムいっばいの音量で聞こえてくる。時間にして5分から10分間位である。聞くところによると通常一日に5回のお祈りをするそうである。ほんとにこの国の人は信心深いと思ったが、彼らに言わせると我々が余りにも無関心なのかもしれない。私の部屋に議論にきた学生もこちらに失礼にならぬ程度に祈りの時間が来ると一寸礼拝のため退席しますと行って出かける。このような環境があるものだと感心した。朝食が終わると大学の運転手が車で迎えに来る。運転手は英語の理解は出来るが殆んど話せない。しかし外国からの訪問者の送り迎えには支障はないようであり、また身分的にも保証されて大学が準備した住居に住んでいる。これは私の推量だが、この国の社会ではウルドゥー語が一般言語だが社会的地位が昇につれ英語が必要になり、その出来、不出来で職種が決まるような気がした。宿舎の料理人はカシミール人で殆んど英語が話せず、一方世話係はかなり英語ができて恐らく給与にも差があるのであろう。勿論大学では英語が公用語となっており、このことから大学院生はこの社会では既に超エリートである。

ある日曜日、M. Mazhar教授が今日は50km程郊外にあるテキシーラにピクニックに行こう

と奥さんを伴って大学院の女子学生2名と一緒に宿舎にやって来た。その時初めてテキシーラがガンダーラのことであることを知った。それまでに女子学生とは何度か議論などもやって普通に会話をしていたのだが、教授夫人となるとやはり育ちが違うみたいで見知らぬ男性ましては外国人とは気軽に会話をしない慣習らしかった。これに似たような経験はレストランで数組のグループが入ってきたが席は男女別々に食事をとり、会話も別々に楽しそうにしているところを目撃し、またA. Choudry 博士の奥さんにもうっかり握手を求めて拒否されたこともあり、男女間の様子に日本の古い言葉で「男女7歳にして同席せず」ということを思いだした。それはさておきガンダーラ史跡とは中学時代に歴史で習って、一度は訪ねてみたいと思っていた。世界遺産であるこの有名な史跡への貴重な見学機会であり、喜んで行くことを承知した。素人なので仏像などの詳しいことは判らぬがどうも日本で見る仏像の顔立ちとは少し違うような気がした。中には口ひげを蓄えた仏像もあり、遠い日本まで伝わるまでに色んな変遷の歴史があったであろうことを感じた。これら貴重な数千年前の作品が一般見学者に曝されて余りにも無防備な警戒であったのは心配であった。



写真—2 ガンダーラ(タキシーラ)の仏像

6. 他大学へ

QUAID-I-AZAM 大学での講演の途中にパキスタンの他の3箇所、カラチ、ムルタン、ラホールの大学を訪問することになった。この国の面積はおよそ日本の2倍、人口は約1億6千万人であるが、日本と似て南北に細長くそのほぼ西側半分は砂漠地帯である。従って人口密度は日本並であり、都市部に人口は集中しており、車も多くその80%は日本製の小型車であった。地方では道路の整備がまだ不十分で埃っぽく、荷車を引くロバの姿が結構目に付いた。

カラチ：イスラマバードから飛行機で約2時間、インド洋に面した所為か11月半ばであるがむっとするほど気温が高かった。人口1000万を越えたこの国最大の都市である。良く整備された大学のキャンパスも広大で、ふと米国の大学のキャンパスに居るような錯覚を覚えた。前首都地であっただけに外国人も多く行き交っていた。カラチ大学はあまり大きくその全貌はよく判らなかったがそのH. E. J. Research Institute of Chemistry を訪れ、講演し、実験室や機器の見学を行った。この研究所では米国の大学を退職したProfessorがここで何人も再就職して基礎研究を行っていた。その内の一人のProfessorが「The professors never retire from the job.」と云った言葉は印象的であった。とにかくこの国第一の都市だけあって研究・教育等にイスラマバードの大学の素朴さとは異なる躍動する活気が感じられた。

ムルタン：この地は地理的にはパキスタンの中心に位置し、歴史上インダス河流域に発達したインダス文明やガンダーラ時代などを通して古くからシルクロードの要所の一つであった所で現在はイスラム教のメッカとして大勢の人々が街中に溢れていた。この地のマンゴーは美味しく有名との事であったが残念ながら時期外れでその味は賞味できなかった。この地方はパンジャブ州に所在し、パンジャブと云う名は五つの川が集まっているとの意味だそうで、イン

ダス河の支流で運ばれた肥沃な大地にマンゴアの畑が延々と続き、他には綿、米、麦等の生産が有名とのことであった。ここでは大学の宿泊所に泊まったのであるが、他大学への訪問や遺跡の見学には5人の銃を持った警察官が一台のジープに乗って我々を先導してくれたのには驚いた。特別に危険なことは無いのであるが、人ごみによる雑踏のため当局がトラブルを懸念したためであった。ここの大学の物理部門には日本のつくば学園都市で5年間博士課程で学んだ若い先生が在職されていた。

ラホール：一旦イスラマバードに戻り、残った講演の義務を消化した後、最後の訪問地ラホールに向かった。イスラマバードから東へほぼ300km、インドと国境を接する古い都市で世界的にも観光地として知られている所である。ここのG. C. Universityは1864年創立の伝統ある大学での講演には九大理学部化学科で学位を受けたL. U. Khan 教授に私の紹介ならびに司会をして頂いた。昔イギリス人が街中に運河を作り交通・運搬手段として利用した跡があった。このラホールはインド大陸の北部に位置し、その東端はインドと国境を接している所で毎日午後5時にインド側とエールの交換儀式がありそこにパキスタン側とインド側から大勢の見物客が訪れる。車で1時間ほどのその場所に案内して貰った。もともと人種的にはほぼ同じ民族で、3世代ほど遡ると互いに反対側に祖先の地があり、墓地がある人も多く、互いに郷愁を感じているのであろう。交換儀式はとても盛り上がっ



写真—3 ラホールでのインドとのエール交換儀式

ており、この様子では直ぐにも再度合併しても良さそうな雰囲気ではないかと無責任にも思った。

結局、パキスタンでは合計9回の講演を行い、院生、Faculty memberとの議論を行って1ヶ月が過ぎた。私の専門分野である膜の基礎研究はまだこれからの課題であった。滞在中は各地で熱い歓迎を受けたが、これは裏を返せば日本による経済援助に期待する意味を含んでいた。11月25日の最終日は大学の学園祭でこれは大学の公式行事なようでFaculty memberも参加して年間の成績優秀者の表彰などが行われた。その後、深夜イスラマバード空港より帰路に着いた。

7. その他

以上がイスラマバードに2週間、あとの2週間でそれ以外の都市を訪れ合計1ヶ月の滞在中で垣間見たパキスタンであった。この滞在中を通して初めてのイスラム圏の異質な文化に接したのであるが、この経験を通して貴重な異なる世界の文化を知った。終りにパキスタンについて印象的であったことを2、3加えることにする。

まず貧富の差が大きかった。上層階級にある人たちにはゆったりと豊かに生活を送っているようだった。例えば大学に勤務する人たちはその地位に応じて広い庭付きの家屋が与えられ、4、5人の手伝い人が住み込みで家の仕事をやり何ら不満がないようである。ある時イスラマバードの郊外を車で走っているととんでもなく長く続く囲いの塀がありその一箇所に2、3人の銃を持ったガードマンがその敷地を警護していた。これは単なる金持ちの家屋敷だと説明があったが日本では考えられない光景であった。一方最下層の人たちの暮らしは貧しい生活様式であった。大学に行く途中の村はイスラマバードの官庁街から車で僅か10分程の場所だがとても貧しく住む家はトタン葺きの小屋であった。

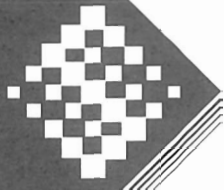
イスラム圏ではアルコールはダメとは聞いていた。何とかなるであろうと軽く考えていたが実際に当地では法律で禁じられているようで、お酒が好きな私はほんとに驚いた。周りの人は気を遣ってやたらとコーラやコーヒー、その他の清涼飲料水を勧めてくれたが、レストランに行くと水だけとはなんと悲しかった。がしかし結局滞在中は一滴も口にせず過ごした。やれば出来るものである。

大学を訪問するとまず最初に学長、あるいは総長に挨拶に行く。そういう地位にいる人は心得ていてすごく歓迎的であり、挨拶の内容が単純でもあり英語もわかりやすい。時には数名の訪問者と一緒になることがある。彼らと一緒に雑談しているうちにいつの間にか全く別の国際会議に学長の車に乗せられて連れ込まれたことがある。のんびりしたものである。時間的余裕があったせいもあり半日その講演を聴き、ランチパーティにまで(アルコールなし)参加した

こともあった。バイオサイエンス系の研究講演会の特別講演ではパキスタンの平均寿命が短いのは貧困と無知による幼児の健康管理が充分でなくこれを克服する必要があると強調していたのが印象的であった。

以上が私の一ヶ月間のパキスタン国滞在記の拙文である。今振り返ってみると、私が交流したのは国の上層部の一部の人達である。誠に偏った一握りの大学関係者であった。勿論これでもってパキスタンの全体を語ることは出来ない。またこの文章自体私の独断的であり正確さは勿論ここには見られない。どうか単なる読み物としてご勘弁頂きたい。

最後に最近のニュース報道でパキスタンおよびその周辺国での様々な騒動が伝えられている。これらの紛争が一日も早く収まり平穏な社会が訪れることをわずか1ヶ月での滞在ではあるが当地で交流を持った者として切に願っている。



—— 広島大本営行在所の一角 ——
あんざいしよ ひとこま

明治天皇と絵巻物

太田 健一

日本塩業研究会代表

昨年1月、『文藝春秋』2月特別号の巻頭に作家・阿川弘之氏の「明治天皇と広島大本営」と題する随想が掲載され、興味深く拝読した。氏はドナルド・キーン著『明治天皇』（角地幸男訳、新潮文庫）を熟読され、日清戦争勃発時に広島に大本営が設置されたことに関し、出征兵士の輸送基地となった宇品で少青年期を過ごされた記憶を語られた興味深いものである。

阿川氏の記述の中で私が注意をひかれたのは次の一節である。

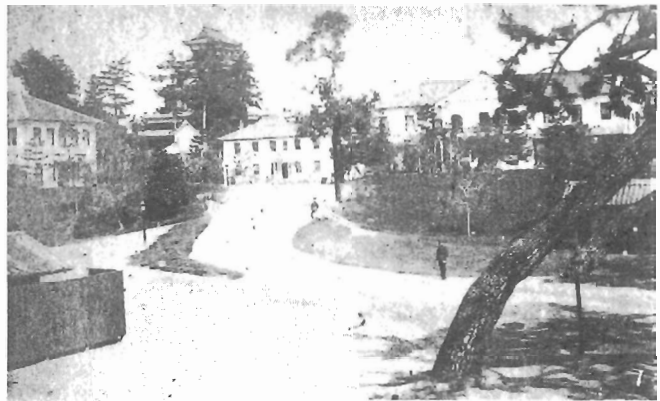
玉座のうしろの金屏風と壁の八角時計以外、飾る物の何一つない御座所へ、せめて安楽椅子を入れ、冬に向けて暖炉を用意しようと側近が勧めても、陛下は「戦地に斯くの如きものや有る」と言ひ、「出征将卒の苦労を思はば不便何かあらん」と言つて拒否されたこと（後略）

阿川氏は、大本営での明治天皇が大元帥として全軍統率の職責を厳しい姿勢で全うされたことに感銘されたのであり、私も同感である。

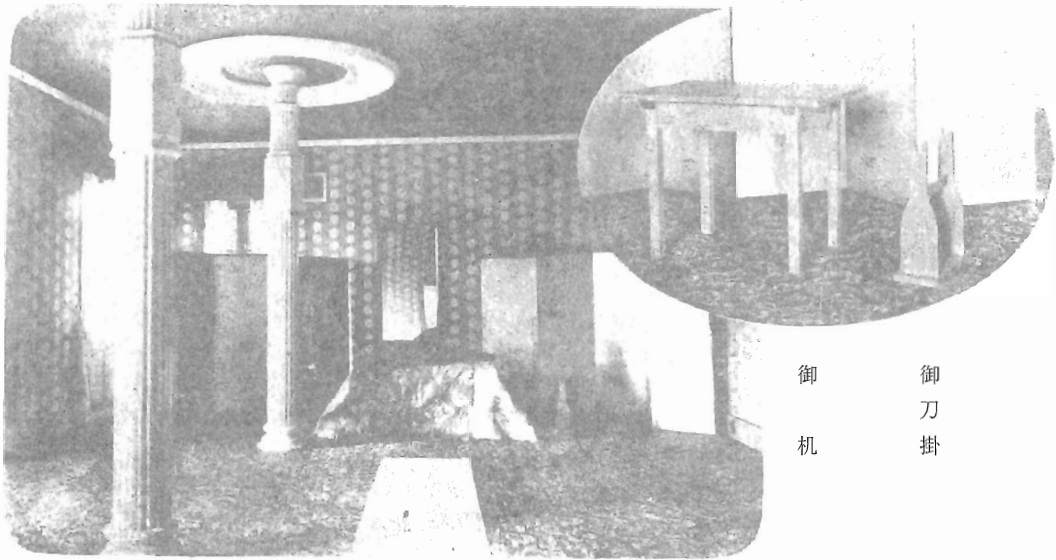
その上に立って本稿では、陛下の周辺に居た人々がいかにして陛下の緊張感を緩和しようとしたかの取り組みの一端を紹介したい。



明治27(1894)年、広島市中島本町「名木」方に寄寓していた製塩家で岡山県選出の貴族院議



写真一 広島大本営。10月1日に従軍写真班が撮影したもので、中央右が大本営が置かれた第5師団司令部、中央左に広島城天守閣が見える。（檜山幸夫『日清戦争』より転載）



座 玉

御 御
机 刀
掛 掛

写真一2 広島大本営行在所の玉座・御机・御刀掛 — 畑耕一『広島大本営』より転載 —

員であった野崎武吉郎は、10月19日午前9時半に次のような書状を岡山県児島郡味野村の留守宅に送信した。



写真一3 明治27年当時の野崎武吉郎
— 野崎家塩業歴史館提供 —

前刻、軍事局長陸軍少将岡沢精君来訪被申候ニハ、行在所御手狭ニ就テハ陛下御運動モ不被為遊、日夜軍国ノ事ニノミ 大御心ヲ痛メサセラレ、御慰ミモ無御座誠ニ恐入タル次第ニ有之、就テハ兼テ御好モ被為在候ニ付、此程来浅野侯爵所蔵ノ書画類ヲ 玉座ノ周囲ニ列掲シ僅ニ御目慰ミヲ被為遊候事ニ取計候、然ルニ同侯ノ所蔵品モ限リアルコトトテ、日ヲ永ク続ケ候事も難出来、依テ池田侯爵ニモ御内談申入置候事ニ候、又貴君(小生ヲ指ス)ニハ種々御所蔵モ可有之、且御県内諸氏ニモ所蔵ノ品沢山可有之ニ付、貴君ノ御周旋ニテ供 御内覧候様致度、尤此儀ハ表立チタル事ニハ無之候間、県知事ニ公然照会スル等ノ事ハ不致候心得故、其積ニテ御配慮相成度云々トノ内談ニ有之候、実以恐入候事ニ候、就テハ外方ノ儀ハ当方ニテ取計ヒ、当県知事ヘモ相談可致ニ付、先以小生方所蔵ノ分丈至急取寄セ岡沢氏迄差出度候間

呉春、景文、豊彦、応拳、梅逸、海屋、山陽、竹田、直入、金峨

等其他近代ノ名家ノ書画(就中重モニ画ヲヨシトス)中秀逸ノ分選択、可成多数ニ至急送付方御取計可有之候、尤平生 御好モ不被為遊候

野崎武吉郎ノ書状
 大正心ヲ補シテモ
 以慰目ニシテモ
 先次身ニラシ
 御好ミヲ
 浅野侯者
 日次軍国ノ事ニノミ
 陛下
 此
 陸軍少将
 切掛
 野崎武吉郎ノ書状



写真—4 野崎武吉郎の書状(明治27. 10. 19認) — 野崎家塩業歴史館提供 —

床から就寝まで軍装を着け、拍車を付けた軍靴を履いておられたというから、身体への重圧はたいへんであったものと推定される。これに加え、大本営における御前会議は9月16日から10月末日までに31回開催され、天皇はその全てに臨席されて戦況報告を聴くと共に、大本営では戦場帰還者からの戦況報告を受け、さらに出征軍の佐官・尉官とも積極的に謁見を続けられている。天皇に書画類を御見せするという岡沢軍事局長(陸軍少将)の発想は「御運動モ不被為遊、日夜軍国ノ事ニノミ 大御



写真—5 明治天皇閲覧の大山縁起絵巻 — 野崎家塩業歴史館所蔵 —

心ヲ痛メサセラレ」ている天皇を「御慰^{おなぐさ}ミ」するということであった。当時、大本営には複数の局員も存在しており、また侍従武官の齋藤実海軍少佐とも相談した上での行動であったと思われる。なお、当時齋藤侍従武官の上席に当たる官内次官には岡山県出身の花房義質がいた。

第2点、岡沢軍事局長は野崎武吉郎に対し、どのような経緯をふまえてどのように依頼したのであるか。書状より推測すると、岡沢局長の野崎武吉郎への接触は、10月19日早朝であったと思われる。岡沢局長はこの訪問に至るまでに、すでに浅野長勲侯爵(旧広島藩主、貴族院議員)に依頼して所蔵品を借り出し天覧に供していたことが判明する。日替わりで供していたが、浅野侯爵の所蔵品にも限界があるため、目下、池田侯爵(池田章政、旧岡山藩主、貴族院議員)にも借用の依頼をしている。ついでに、野崎家の所蔵品及び岡山県内諸家の所蔵品を集めて内覧に供するための「周旋」を御願いたしたいとの突然の申し出であったことが判明する。なお、この時の局長の言に、「此儀ハ表立チタル事ニハ無之候間、県知事ニハ公然照会スル等ノ事ハ不致」るように配慮して呉れとの意向が示された。

第3点、軍事局長の依頼を受けて野崎武吉郎はどのように対応したのであるか。書状によれば、今回の依頼を「実以恐入候事」と受け止めた野崎武吉郎は早速に筆を執り、岡山県味野の留守宅に所蔵品を抽出して広島大本営に届けることを指示した。その際注目すべきは呉春・応挙などの作品を上げると共に、対戦国の書画を避けること、また天皇が詞書(ことばがき)の入った絵巻物を好まれているので、大山縁起と住吉物語の両絵巻を持参するように指示している点である。



10月19日午前9時半に認められた野崎武吉郎の書状は、翌20日午前8時10分に味野の野崎邸に着信した。武吉郎の養嗣子たる野崎統太郎は当主武吉郎の指示にしたがって天覧に供する

書画を蔵の中から選別し、書画に精通した加茂岩太郎に携帯させて大本営に差出させた。加茂が持参した日は20日の夕刻であったことは次の書状(野崎武吉郎より統太郎宛10月22日午後9時認、翌23日味野到着)によって判明する。

一昨夕、加茂持参之画幅昨日奉供 叡覽置候処、思召ニ叶ヒ候趣ニテ御留置ニ相成、今日手島 大本営へ相伺候処、未夕御下ケニ相成居不申候、九鬼隆一君ノ話ニ竹田ノ山水ハ無類ノ絶品、岸駒ノ若松ニ鶏も頗別品なり、呉春モ甚正敷モノナレトモ老後ノ作ニハ有之間敷申事ニ候、其他林子爵(友幸)ニモ大本営ニテ拝見セシカ、何レ撰リ抜キノミナリ云々トノ賞詞も有之、大二面目ヲ施シ申候、然ルニ今曉三原・本郷辺ニテ軌道破損ノ為(原因ハ地震ナリト云フ)汽車延着、今以加茂参着不致(今朝十時七分三原発加茂ノ電信、同四十三分着信セリ)多分明朝迄ニハ来着可致ト相待居申候(今午後、手島ヲ代トシテ大本営ニ出頭セシメ、延着ノ御断ヲ申上サセ置申候)、着候ハバ直に進覽致候筈ニ候(後略)

十月廿二日午後九時 武吉郎
統太郎殿

上記書状によれば、10月20日夕刻に大本営に持参された野崎家美術品は翌21日天覧に供された。結果は「思召ニ叶ヒ」、武吉郎のプレーンの1人である手島知徳が22日に大本営を訪問したところ、未だ返還されない状況であったという。2つの絵巻物の絶品の数々に天皇が満悦されている様子が想定される。美術品は九鬼隆一(男爵)や林友幸(子爵、貴族院議員)も拝覧している。両人も「無類ノ絶品」「何レモ撰リ抜キ」と絶賛したらしいことが伺われる。美術品の第2弾が10月22日には加茂によって広島大本営に運ばれる予定であったが、三原・本郷間が地震によって軌道が破損され、到着は1日遅れて23日になったことも推定される。

後日、広島大本営により返却された美術品は「明治二十七年十月広島大本営にて天覧に供する」旨が銘記されて野崎家内蔵に保管されてきている。なお、2つの絵巻物については大正5

(1916)年11月23日、岡山市三門学園内の山田貞芳宅にて東京帝国大学三上参次文学博士の閲覧を受けている。



明治27(1894)年9月から10月にかけて野崎武吉郎は多忙を極めた。9月22日広島に議会召集の詔勅が発せられ、貴族院議院野崎武吉郎は広島に赴き、中島本町の名木宅に寄寓して開院にそなえた。衆議院第7議会は10月18日開会され、貴族院は10月22日午前11時に開院式を挙行している。

この日、野崎武吉郎は10月22日付の書状によると、午前11時の貴族院開院式に出席した後、午後2時半より杉溪・千阪の両貴族院議員と共に、配下の手島知徳・白岩龍平を同伴して陸軍病院を慰問し、午後4時からは浅野侯爵邸で大本営より下賜された御酒をいただき6時前に帰宿している。この間、前日の21日には午後4時から開催された浅野侯爵邸の園遊会(参加者千人)に参加し、夜には塩業者の会合に出席している。

この塩業者の会合は、竹原の塩業者頼俊直が幹事長となり、料亭寿志久で鎌田勝太郎・橋本吉兵衛ら数名の塩業者が「塩業上ニ就キ集談」

しようとしたもので、白岩龍平が「清国塩政」について談話し、日清戦争後の日本塩業政策について協議したものと思われる。また、この席上において来る11月15日を期して、「十州ノ重ナル塩業者広島へ会合、緊急事件ノ協議致」すことを評決している。



以上、野崎武吉郎が認めた2通の書状によって、明治27年10月中の広島大本営行在所における明治天皇の御動静を窺い知ることができた。と同時に、明治23年貴族院多額納税者議員となった野崎武吉郎が就任約4年を経過した時点でこのように精力的な活躍をしていることは、近衛篤磨(初代貴族院議長)や東久世通禧(当時、枢密院副議長)との親交もさることながら、その人格と政治的資質において卓越したものを有していたと評価できるのではないかと思う。

追記

野崎家文書の閲覧・利用をお許し頂いた(財)竜王会館理事長野崎泰彦氏に対し厚く御礼申し上げます。また、史料採集に際し御尽力賜った野崎家塩業歴史館の各位に深く謝意を表する次第です。(2009. 6. 24記)

第44回評議員会・第48回理事会を開催

去る5月25日、東京都千代田区のKKRホテル東京において第44回評議員会及び第48回理事会が開催されました。

評議員会では、役員1名の選任が行われたほか、平成20年度の事業報告及び収支決算報告、新公益法人への移行の件が審議されました。

引き続き開催された理事会では、平成20年度の事業報告及び収支決算報告、新公益法人への移行の件が審議され、それぞれ原案どおり承認されました。

平成20年度の事業報告の概要は以下のとおりです。



第44回評議員会



第48回理事会

平成20年度事業報告

1. 塩及び海水に関する科学的調査・研究の助成

(1) 平成20年度分研究助成の実施

平成20年度はプロジェクト研究3テーマ(理工学分野6件、医学分野6件、食品科学分野5件)、一般公募研究48件、財団設立20周年記念助成4件の合計69件に対して総額97,290千円の助成を行った。

(2) 平成21年度分研究助成先の選定

平成20年11月1日から平成20年12月20日まで公募を行い、一般公募研究については、187件の応募に対し21件を選定した。プロジェクト研究については、理工学分野(3年度目)で引き続き6件、医学分野(2年度目)で引き続き6件の助成を行うこととした。また、平成21年度から開始する農学・生物学分野のプロジェクト研究では12件の応募に対し4件を選定した。設立20周年記念助成(2年度目)については、引き続き4件の助成を行うこととした。(助成件数合計41件、助成金額合計50,00千円)

(3) 助成研究発表会の開催と成果のまとめ

平成20年7月29日(火)に都市センターホテル(東京)において、第20回助成研究発表会(平成19年度助成研究63件)を開催した。また、助成研究の成果をまとめた「平成19年度助成研究報告集」、「助成研究報告書(農学・生物学プロジェクト研究)」を平成21年3月31日に発行した。

2. 情報誌等の編集・発行

情報誌「月刊ソルト・サイエンス情報」を第20巻4号から第21巻3号まで、機関誌「そるえんす」季刊を77号から80号までを発行した。また、平成19年度の事業実施状況、会計報告等をまとめた「事業概要」を発行した。

3. 情報の収集及び調査・研究

(1) 塩および海水に関する情報については、内外のデータベースを活用して、効率的な収集を行

- うと共に、海外の関係機関からの情報収集に努めた。
- (2) 学会等への参加については7学会、研究会等については1件について参加し、情報の収集、状況の把握・調査に努めた。
4. シンポジウム、講演会、研究会の開催・後援
- (1) シンポジウムの開催
- 平成20年9月29日(月)に早稲田大学国際会議場において、財団の情報普及活動としてソルト・サイエンス・シンポジウム2008「塩の利用と生活」を開催した。
- (2) シンポジウム等の共催
- 日本海水学会の西日本支部企画シンポジウム、若手会企画講演会及び海水資源・環境研究企画シンポジウムを共催した。
5. 財団設立20周年記念事業の実施
- 第20回助成研究発表会の開催に合わせて財団設立20周年記念交流会を開催し功労者に感謝状を贈呈した。
6. 広報活動の充実
- ホームページを活用した研究助成の公募の効率化を推進するとともに、ホームページの内容を更に充実させ財団の活動について周知を図った。
7. 関係学会等との関係強化
- 日本海水学会の企画・運営に協力するとともに、シンポジウム、講演会を共催するなど、関係学会等との関係強化に努めた。
8. 効率的業務遂行体制等の構築
- 財団内コンピューターのネットワーク化を図り、情報を共有することにより、効率的な業務遂行体制の構築を進めた。また、政府が行う公益法人制度の見直しに対応するため情報収集を行うとともに新公益法人への移行の準備を進めた。

財団だより

I. 第21回助成研究発表会を7月21日に開催

財団法人ソルト・サイエンス研究財団は昭和63年の設立以来、製塩技術開発の促進あるいは塩の生理作用に関する研究など、塩に関する総合的な研究の助成を行うとともに、助成研究発表会を平成元年より毎年度開催し、これらの研究助成の成果を広く社会に公表してまいりました。

平成21年度は第21回助成研究発表会を開催し、平成20年度の研究助成の成果69件の発表が行われます。研究者の方々はもとより一般の方々のご参加をお待ちしております。また、研究発表会終了後、

交流会を開催いたしますので、あわせてご案内いたします。

1. 日 時：平成21年7月21日(火)
9:30～17:00(受付・開場 9:00～)
交流会：17:00～19:00
2. 場 所：都市センターホテル
6・7階 受付6階
東京都千代田区平河町2-4-1
Tel：03-3265-8211
3. 参加費：無 料



最寄駅と所要時間

- 東京メトロ 有楽町線「麹町駅」半蔵門方面1番出口より徒歩4分
- 〃 有楽町線・半蔵門線「永田町駅」4番・5番出口より徒歩4分
- 〃 南北線「永田町駅」9b出口より徒歩3分
- 〃 丸の内線・銀座線「赤坂見附駅」D出口より徒歩8分
- JR中央線「四谷駅」麹町出口より徒歩14分

第21回助成研究発表会プログラム

第1会場(601) 理工学分野、20周年記念助成

発表番号	時刻	課題名	助成研究者	所属
一般公募研究(理工学分野) 座長 越智 信義(日本塩工業会技術委員会委員長)				
1	09:30~09:45	連続式食塩晶析装置の高懸濁濃度化・スケールアップに関する基礎的研究	三角 隆太	横浜国立大学
2	09:45~10:00	計算化学的手法による水溶液中でのイオンの溶存状態およびイオンに配位した水の安定性に関する研究	大井 隆夫	上智大学
3	10:00~10:15	自己集積錯体によるリチウムイオンの高選択的分離	勝田 正一	千葉大学
4	10:15~10:30	食塩結晶固結防止剤の作用メカニズム	新藤 斎	中央大学
5	10:30~10:45	塩化ナトリウムおよび関連する塩を利用した超高感度分光法の研究	二又 政之	埼玉大学
6	10:45~11:00	食塩からの光触媒クリスタルの創成と環境機能材料応用	手嶋 勝弥	信州大学
7	11:00~11:15	バイオマスプラスチック製濾過膜を用いた海水濾過技術の開発	田中 孝明	新潟大学
一般公募研究(理工学分野) 座長 柘植 秀樹(慶應義塾大学名誉教授)				
8	11:30~11:45	にがりを用いた食品廃液処理のための高機能凝集沈殿剤の開発	豊原 治彦	京都大学
9	11:45~12:00	塩化ナトリウム水溶液を含む多孔材料のマイクロ波併用過熱水蒸気乾燥に関する研究	伊興田浩志	大阪市立大学
10	12:00~12:15	塩化環境下における高耐食性合金の水素吸収挙動の定量評価	横山 賢一	九州工業大学
11	12:15~12:30	新規有機ホウ素系防汚剤の高感度分析法の開発とその分解速度の測定	福士 恵一	神戸大学
財団設立20周年記念助成研究 座長 柘植 秀樹(慶應義塾大学名誉教授)				
	13:20~13:25	記念助成研究概要説明:今後10年を見据えた多面的総合的研究—海水・海洋資源の有効利用—		
12	13:25~13:40	環境保全に配慮した海水資源の総合的利用技術に関する可能性研究	滝山 博志	東京農工大学
13	13:40~13:55	死海の耐塩性ラン藻遺伝子の機能解析とその応用	高倍 昭洋	名城大学
14	13:55~14:10	野生海藻に寄生する海洋微生物が生産する新規な生理活性物質の探索	水品 善之	神戸学院大学
15	14:10~14:25	亜鉛摂取不足と塩味嗜好増大を関連づける遺伝子群の網羅的解析	三坂 巧	東京大学
一般公募研究(理工学分野) 座長 柘植 秀樹(慶應義塾大学名誉教授)				
16	14:25~14:40	高透過性ナノ多孔性セラミック膜の開発と表面特性制御による電解質の高阻止化	都留 稔了	広島大学
17	14:40~14:55	低抵抗・高選択透過性を有する親水性マトリクス複合イオン交換膜の開発	比嘉 充	山口大学
18	14:55~15:10	コンクリートの耐久性(凍結融解抵抗性)を考慮した融雪剤の検討	羽原 俊祐	岩手大学
プロジェクト研究(理工学分野) 座長 中尾 真一(工学院大学工学部教授)				
	15:25~15:30	プロジェクト研究概要説明:製塩環境における腐食の機構解明と評価技術の開発		
19	15:30~15:45	オーステナイト系合金の応力腐食割れ感受性マップ構築とその機構的理解	渡辺 豊	東北大学
20	15:45~16:00	高濃度塩環境における銅合金の流れ誘起腐食	矢吹 彰広	広島大学
21	16:00~16:15	製塩プラントにおける腐食管理のための溶存酸素モニタリングに関する研究	八代 仁	岩手大学
22	16:15~16:30	電位ノイズ法を用いた濃厚塩化物水溶液中での局部腐食発生の予測技術の開発	井上 博之	大阪府立大学
23	16:30~16:45	光ファイバAEシステムを用いた製塩装置の局部腐食モニタリングと診断	長 秀雄	青山学院大学
24	16:45~17:00	製塩環境における金属材料腐食挙動の多分割電極法を用いた計測	安住 和久	北海道大学

第2会場(606) 食品科学、農学・生物学分野

発表番号	時刻	課題名	助成研究者	所属
一般公募研究(食品科学分野) 座長 阿部 啓子(東京大学大学院教授)				
25	09:45~10:00	腸管のカルシウムトランスポーター発現調節機構の解析	佐藤隆一郎	東京大学
26	10:00~10:15	サーカディアンリズムから見た食塩の摂取タイミング	大池 秀明	農産・食品産業技術総合研究機構
27	10:15~10:30	アクアポリン欠損マウスを用いたイオン恒常性維持に関する食品・栄養科学的研究	岡田 晋治	東京大学
28	10:30~10:45	食品香気放散(フレーバーリリース)におけるミネラル塩類の効果	小竹佐知子	日本獣医生命科学大学
29	10:45~11:00	微生物の高圧死滅挙動に及ぼす添加塩の影響	藤井 智幸	東北大学
プロジェクト研究(食品科学分野) 座長 木村 修一(昭和女子大学大学院特任教授)				
	11:15~11:20	プロジェクト研究概要説明:「にがり」を中心としたマグネシウムの食品栄養学的研究		
30	11:20~11:35	マグネシウム欠乏に関する栄養生理学的・病理組織学的検索	池田 尚子	昭和女子大学
31	11:35~11:50	にがり成分の生体内ダイナミクスと代謝吸収過程のイメージング	榎本 秀一	岡山大学
32	11:50~12:05	マグネシウムの欠乏および対カルシウム比の生体への影響に関するDNAマイクロアレイ解析	上原万里子	東京農業大学
33	12:05~12:20	食塩の味覚応答に及ぼす「にがり」及び各種マグネシウム塩の影響	駒井三千夫	東北大学
34	12:20~12:35	日本人のマグネシウム・カルシウム摂取量の実態に関する研究—陰膳実測法による個人別摂取量による評価—	渡辺 孝男	宮城教育大学
一般公募研究(農学・生物学分野) 座長 小林 達彦(筑波大学大学院教授)				
35	13:30~13:45	好塩菌由来DNA/RNA結合タンパク質の高塩濃度環境適応メカニズムの同定	古賀 雄一	大阪大学
36	13:45~14:00	海洋性光合成微生物に含まれるクロロフィルの分解挙動解析	佐賀 佳央	近畿大学
37	14:00~14:15	黄砂バイオエアロゾルによって長距離輸送される耐塩細菌群の分離分析	牧 輝弥	金沢大学
38	14:15~14:30	黄色ブドウ球菌のカルジオリピン発現誘導による耐塩性メカニズム	森川 一也	筑波大学
一般公募研究(農学・生物学分野) 座長 蔵田 憲次(東京大学大学院教授)				
39	14:45~15:00	高等植物の塩・乾燥ストレス耐性の概日リズムによる制御—塩・乾燥ストレス応答性遺伝子の発現が概日リズムによって制御されている意味は?—	清末 知宏	学習院大学
40	15:00~15:15	塩ストレスがトマトの機能性成分に与える影響:塩ストレスが引き起こすアスコルビン酸含量の変化と光・温度環境との相互作用	圖師 一文	尚絅大学
41	15:15~15:30	植物の塩ストレス耐性に寄与する液胞膜プロトン輸送性ピロホスファターゼおよびカチオンセンサータンパク質に関する研究	前島 正義	名古屋大学
42	15:30~14:45	Na ⁺ イオン排出ポンプ制御に機能する塩応答シグナル分子を利用した高糖度トマトの分子育種法の開発	湯浅 高志	九州大学
一般公募研究(農学・生物学分野) 座長 林 良博(東京大学大学院教授)				
43	16:00~16:15	耐塩性プロテアーゼ遺伝子の解析と組換え微生物による同酵素の大量生産	竹中 慎治	神戸大学
44	16:15~16:30	水産生物を模倣した結晶化制御ナノ技術の分子基盤	村本 光二	東北大学
45	16:30~16:45	表在性タンパク質の脂質修飾による光合成の安定化と耐塩性の改良	和田 元	東京大学
46	16:45~17:00	ミネラル給与によるブタの問題行動、特に尾かじりの防止とその生理的メカニズムに関する研究	青山 真人	宇都宮大学

第3会場(706) 医学、食品科学分野

発表 番号	時刻	課 題 名	助成研究者	所 属
プロジェクト研究(医学分野) 座長 森田 啓之(岐阜大学医学部教授)				
47	09:30~09:35	プロジェクト研究概要説明:生体におけるK ⁺ 輸送とその制御機構	桑原 厚和 種本 雅之 河原 克雅 佐藤 博亮	静岡県立大学 東北大学 北里大学 福島県立医科大学
48	09:35~09:50	腸管でのK ⁺ 吸収・排泄機構とその制御		
49	09:50~10:05	腎遠位尿管K ⁺ チャネルの機能発現制御機構の解明		
50	10:05~10:20	腎尿管のK ⁺ 分泌とK ⁺ チャネル		
51	10:20~10:35	カリウム過剰摂取によるインスリン抵抗性改善作用とその作用機序の解明についての研究		
52	10:35~10:50	膵β細胞におけるKvチャネルによるインスリン分泌制御機構の解明	出崎 克也	自治医科大学
52	10:50~11:05	電位依存性及びカルシウム活性化カリウムチャネルの多様な生理機能と病態的意義	大矢 進	名古屋市立大学
一般公募研究(医学分野) 座長 岡田 泰伸(自然科学研究機構生理学研究所長)				
53	11:20~11:35	網羅的エピゲノム解析システムを用いた食塩感受性高血圧症発症機構の解明と影響を与えるリスクに関する症例対照研究	有馬 隆博	東北大学
54	11:35~11:50	プロテアーゼによるENaC寿命決定メカニズム	丸中 良典	京都府立医科大学
55	11:50~12:05	プロテアーゼによるバソプレッシンの血管透過性調節機構に関する研究	宮田 清司	京都工芸繊維大学
56	12:05~12:20	高食塩ストレスによる薬物代謝酵素の遺伝子発現制御機構の解明	伊藤 崇志	兵庫医療大学
57	12:20~12:35	水晶体発達と白内障発症メカニズムにおけるNa-Ca交換体の役割	毛利 聡	川崎医科大学
一般公募研究(食品科学分野) 座長 香西 みどり(お茶の水女子大学大学院教授)				
58	13:30~13:45	食塩摂取が食後の急激な血中脂質濃度上昇に与える影響	郡築 毅	東北大学
59	13:45~14:00	亜臨界水による酸性多糖類の分解に及ぼす対イオン形の影響	安達 修二	京都大学
60	14:00~14:15	古細菌膜脂質による脂溶性物質のヒト体内吸収促進作用	菅原 達也	京都大学
一般公募研究(医学分野) 座長 菱田 明(浜松医科大学教授)				
61	14:30~14:45	腎尿管上皮細胞におけるマグネシウムチャネルの発現調節機構と生理的役割の解明	五十里 彰	静岡県立大学
62	14:45~15:00	血管スパスムにおけるNa ⁺ /Ca ²⁺ 交換体・Na ⁺ 透過性TRPCチャネル共役系の役割の解明と新規治療への応用	岩本 隆宏	福岡大学
63	15:00~15:15	腎臓における新規NaCl出納調節系(WNK4-OSR1/SPAK-NCC系)の摂取食塩量による制御機構の解明	内田 信一	東京医科歯科大学
64	15:15~15:30	腎尿管の酸塩基輸送機構と腎尿路結石症における細胞外カルシウム受容体の意義に関する分子および病態生理学的解析	根東 義明	東北大学
65	15:30~15:45	グレリン遺伝子欠損マウスを用いた食塩感受性高血圧の発症メカニズムの解明	佐藤 貴弘	久留米大学
一般公募研究(医学分野) 座長 菱田 明(浜松医科大学教授)				
66	16:00~16:15	食塩感受性高血圧患者における減塩および利尿剤投与の有用性に関する検討(G蛋白共役型受容体キナーゼ4型遺伝子多型を用いたオーダーメイド医療の可能性について)	眞田 寛啓	JA福島厚生連
67	16:15~16:30	Na ⁺ /H ⁺ 交換輸送体と新規相互作用タンパク質の生理的意義の解明	久光 隆	国立循環器病センター
68	16:30~16:45	新規水・塩代謝調節ペプチドの発見とその分子生物学的研究	山口 秀樹	宮崎大学
69	16:45~17:00	絶水に伴う体液恒常性危機に対処する神経機構の解明	山中 章弘	自然科学研究機構

Ⅱ. ソルト・サイエンス・シンポジウム 2009

テーマ：塩と生物

平成21年9月28日(月) 12:30～17:10(開場12:00)

早稲田大学国際会議場 1階 井深大記念ホール 入場無料

1. プログラム

12:30～12:40 ご挨拶 藤巻 正生 東京大学名誉教授 シンポジウム企画委員長
ソルト・サイエンス研究財団研究顧問

12:40～13:40 1) 講演-1 「生物はどのようにして海から陸へ適応したか」
講演者：今井 正 自治医科大学名誉教授
座長：木村修一 昭和女子大学大学院特任教授

13:40～14:40 2) 講演-2 「カリウムの有効性と安全性」
講演者：武藤重明 自治医科大学教授
座長：今井 正 自治医科大学名誉教授

14:40～15:00 コーヒー・ブレーク

15:00～16:00 3) 講演-3 「海水で生育するマングローブ植物の生態と現状」
講演者：北宅善昭 大阪府立大学大学院教授
座長：蔵田憲次 東京大学大学院教授

16:00～17:00 4) 講演-4 「水産発酵食品と微生物」
講演者：藤井建夫 東京家政大学特任教授
座長：藤巻正生 東京大学名誉教授

17:00～17:10 ご挨拶 小村 武 ソルト・サイエンス研究財団理事長

2. 参加申込方法

参加ご希望の方は、住所、氏名、氏名フリガナ、所属、連絡先電話番号等を明記のうえ下記宛にハガキ、ファックスまたはEメールでお申込み下さい(締切日9月18日、先着450名様まで)。

当日の会場でのお申込みも承りますが受付の混雑が予想されますので、事前のお申込みをお勧めします。

〒106-0032 東京都港区六本木 7-15-14 塩業ビル3階

(財)ソルト・サイエンス研究財団 ソルト・サイエンス・シンポジウム2009係

Fax: 03-3497-5712 Email: saltscience@mve.biglobe.ne.jp Tel: 03-3497-5711

3. 会場案内

早稲田大学国際会議場 井深大記念ホール

〒169-51 東京都新宿区西早稲田1-20-14、Tel: 03-5286-1755

主な交通手段：JR高田馬場駅より都バス早大正門行き、西早稲田停留所下車、徒歩約5分。

東京メトロ東西線早稲田駅下車、徒歩約13分。

都電早稲田停留所下車、徒歩約5分。

Ⅲ. 第43回研究運営審議会(平成21年8月31日(月)KKRホテル東京)

平成22年度の研究助成方針及び助成研究公募の方針などが審議される予定です。

編集後記

財団では2009年度中の新公益財団法人への移行を目途として手続きを進めておりますが、5月の理事会で新公益法人移行後の定款が承認されました。現在、内閣府の公益認定委員会へ提出する申請書を作成中で、書式が整い次第、移行申請を行う予定です。順調に審査が進めば、年内にも認定を受けることができるものと期待しております。

第21回助成研究発表会を7月21日(火)に都市センターホテルで開催します。皆様のご参加をお願い申し上げます。

(池)

JUNE / 2009 / No.81

発行日

平成21年6月30日

発行

財団法人ソルト・サイエンス研究財団
The Salt Science Research Foundation

〒106-0032

東京都港区六本木7-15-14 塩業ビル

電話 03-3497-5711

FAX 03-3497-5712

URL <http://www.saltscience.or.jp>